

「やぐら」グラフィティー 番外編

山岡 伸一（45回・S）



話は昭和四十三年の早春、高一の三学期に遡る。中二の時から同じクラスで、中三の三学期の美術のグループ製作の課題を一緒に手掛けて以来意気投合していた尾立弘史が、「おい、櫓を一緒にやらんか」と持ち掛けてきた。

自分自身土佐中に入学して初めての運動会で櫓を目にして、「なんと面白い事をやる学校か！」と感動、絶対櫓の製作委員になるぞ！と密かに心中期していたので、「おう、やろうぜ！」と即応した。が、土佐高では高一・高二ではクラス替えが無いので、高三の行事の櫓作りを一緒にやるためには高二で同じクラスになつていなければならぬ。その保証は無いので、誓い合ったはいいが反面頼りなさを感じていると、「については、高二で同じクラスにしてもらえるように先生に頼みに行こ

う」と、さらに畳み掛けてきた。

そこまで考えていたのか、と感心する一方「そこまでやるか!？」と呆気にとられたが、ともかく引つ張られるようにして、ある日の終業後のホームルームの後、廊下を去って行く当時の担任の数学の武中敏雄先生を呼び止めて、「先生、お願いがあります。実は二人で高三の運動会の櫓を一緒に作りたいと思っておりますが、高二で二人を同じクラスにして頂けないでしょうか」と単刀直入にお願いした。

こんなふざけた趣旨でのお願いがすんなり聞き届けられるとも正直思えず、その場で叱り付けられても不思議は無かったが、先生もただ呆気に取られたのかもしれない、しばしじつと二人の顔を見つめて、「わかった、まあ考えておこう」とおっしゃって歩み去って行かれた。

明けて高二の新学期、なんと首尾良く二人同じSホームになっていて（担任は現国の田内瑞穂先生）、廊下で二人で喜んでいるとたまたま武中先生が通りかかれて、我々を見るや、「どうな、ちゃんと一緒になっちゃったろう」と声を掛けられた。それで二人声を合わせて「はい、有難うございました！」と喜色满面お礼を言った。

しかし、実のところ、これが本当に先生がそのように配慮して下さつて実現したことなのか、たまたまうまく同じクラスになっていたのでそのようなおっしゃったのか、お聞きするわけにもいかず、真相は未だに判断としない。でも、同窓会での話を披露すると、級友たちの多くは「あの先生ならきつと実際にそうし

て下さったんじゃない？」と言うので、自分もやっぱりそうだったに違いないと得心している。

そして高三の夏休み、いよいよ櫓の具体的な構想を相談しようということになって、尾立が家へやって来た。「櫓をやる」と言っても自分の関心の主眼は看板画を描く事にあつて、それはやはり担任の田内先生の似顔絵で行こうと最初から決めていて、それまでに下絵を仕上げ待っていた。当時大学では学生運動が吹き荒れ、この年の一月には東大安田講堂の攻防戦があつて、そのころ現れた「泣いてくれるなおつ母さん、背中の桜が泣いている」とセリフを入れた桜吹雪の刺青の看板絵のイメージを借りて、諸肌脱いだ背中に刺青の渡世人姿の絵に仕上げた。櫓全

体のデザインは、その安田講堂に見立てた塔を中央に据えながら、どうしても和風の感じで行きたいと思い、既に先輩たちも利用していた鉄パイプの足場を組み上げるのでなく、伝統的な丸太の足場に杉・檜の葉っぱを取り付けてと考えていた。

尾立にその案を提示すると、似顔絵の方は即座に気に入ってもらえて、二期の始業式の日にきつと学校へ持って来いと言われたが、丸太の足場案は「いかん。そんなのはきょうび役がかかって仕方が無い。パイプの組み立て足場の方が絶対段取りがえい。和風にしたけりゃ、それに杉やら檜やらの葉っぱを取り付けて隠したらえいがやき」と立ち所に却下された。

新学期、下絵を持って登校すると、尾立はそれを持って早速クラス中に

見せて回り、精力的に根回しを始めた。幸い絵はクラスメートにも好評を得て、早くも、檜の総監督は尾立絵は山岡、という了解がなんとなく出来上がっていた。

ところで、下絵では渡世人姿の田内先生に、取りあえず、背中に回した右手に短刀、左手に「果し状」と書いた紙を持たしておいたが、我ながらどうもピリツとせず、もう一捻り必要に感じていた。一渡り根回しを終えて戻って来た尾立は改めてその下絵をしげしげと見つめて、「果し状かあ…」と呟いてから、不意に「内申書はどうな？」と悪戯っぽく持ちかけた。それを聞くなり「それじゃ!!」とたちまち自分も閃いて、帰宅するや否や暫時、左手に大盃、右手で内申書の束に短刀を突き立てて睨みを効かす図柄に描き変え、そ



田内先生の似顔絵原画

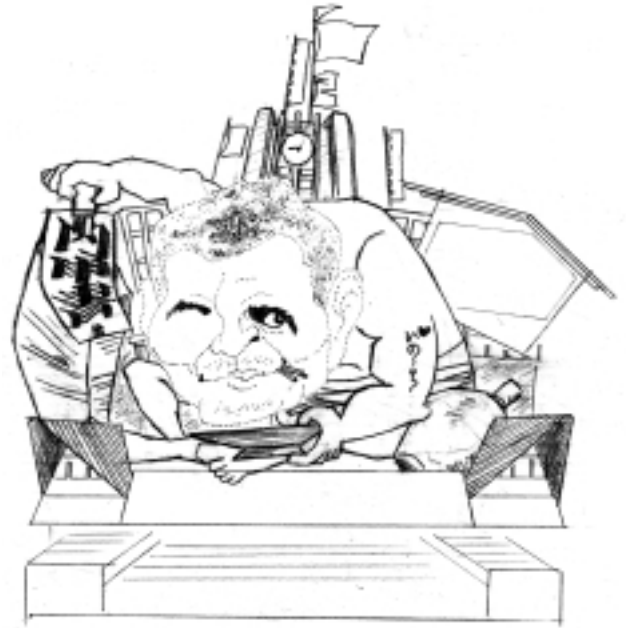
れに合わせて檜のデザインも一気に仕上げてしまった。

その後クラス会で正式に実行委員が決まり、絵は晴れて自分が描かせてもらうことになって、順調に滑り出したかに見えた『三S檜プロジェクト』だったが、ある日の朝礼で担任の田内先生に冷や水を浴びせられることになった。「聞くところによると、諸君らの中では早くも運動会の檜作りに向けた動きがあるようだが、今諸君らは受験を前に非常に重要な時期にある。運動会にはまだ間がある。くれぐれも本分を忘れてうわついた気分になることの無いように」。とはいえ、中一の時から五年間蓄えられてきたエネルギーに、いよいよ火がつけられた今、そう言われたくらいでしゅんとなるような我々ではなかった。むしろ、以後深く静かに潜行しながら着々と計画は進められていった。

その過程で、尾立の設計・施工から資材の調達にいたる実際面での才能にはつくづく感心させられた。兄さんだか先輩達だかから積極的な情報を得て、足場パイプなどの建築材料や杉や檜の葉っぱなどはいつの間にか尾立が調達の段取りをつけていた。その所要所では自分に「おい付き合え」と言ってきた、二度ほど

建築業者などの事務所に交渉に連れて行かれたが、自分は連れて行かれた相手の名前や場所すら覚えていないし、その謝礼をどうしたかもさっぱり記憶に無い。

資材が揃いよいよ檜の建設が始まったある日、何でだったか、田内先生が休みで代わりに朝礼に来られたのだったか記憶がはっきりしないが、Hホームの担任の物理の岡部淳之助先生が我々の教室に見えて、開口一番「お前らという者は実に怪しからん」と堅い表情でのたまわった。「わしらのクラスは檜を丸太で組むために、暫く前からわしも一緒になって昼休みにも放課後にもせつせつせつと穴を掘りよった。ところがお前らは一向に取り掛かる気配が無いので、どうするんじやろと思いついたら、この間ようやくパイプやら資材が届いたと思つたら、たちまちどつとたかって、あれよあれよと言う間にわしらを追い越して組み立ててしまふよつた。人が役掛けてこつこつとやりゆうの尻目に、手っ取り早ようつぱつと仕上げてしまふような遣り口は全くもって怪しからん」と苦り切っておつしやつた。何を言われるかと息を詰めていたクラス中に爆笑がはじけた。「段取りの尾立の面目躍如と言うところだった。



デザイン原図

一方で、肝心の看板画の方の第一の問題は、数センチ角の原画をいかにして縦横数メートルの大きさに拡大するか、という事だった。いくらか考えても名案は浮かばないので、結局、原画を方眼紙に写し要所要所を座標に取って、まず二・五倍、次に五倍と段階的に拡大していき、最後は教室の床に並べたベニヤ板に座標を写して線で結び、教壇のあたりからせいっぱい遠目に眺めて修整する、というやり方であった。

始めのうちはよそのクラスの連中ももちろん当の田内先生にも内容を知られることの無いよう、放課後の教室で部外者立ち入り禁止にしてせつせと描いていたが、いよいよ色を塗る段階になると一枚ずつばらばらにして作業してよく、それなら人に見られても内容を知られる心配は薄いので、補習をサボって早朝から廊下で塗ったりしていた。運動会も近づいたある朝、いつもの様に廊下で塗っていると横に人の気配がしたので、目を上にとやると、数学の本直四郎先生が朝の補習に向かう途中立ち止まって見下ろしておられた。補習もこれはあ熱心に出てくれる

とええですがのオ」数学が苦手な自分には直さんは「天敵」だったので、その場で固まって「ハ、ハイ」と答えただけだった。

いよいよ運動会前日の午後、櫓は大方組み上がって後はほぼ看板画を取り付けるばかりとなり、現場部隊から絵はまだかと矢の催促。ようやく引き渡して、内心早く仕上がりを見てみたいという気持ちを抑えながら教室で後片付けをしていると、現場部隊の堀内雅博が、「山岡、来てみい！ええぞ！」と嬉しげな表情で駆け込んで来た。それに促されて駆け付けて見ると、現場部隊が手際よく組み付けてくれて思わく通りに出来上がった櫓の全容が目に入った。

すかさず尾立が横に来て、「最高！」と満足げな笑みを浮かべ、続けて曰く、「実は高さ違反をやってもうた。予定通りに組み立ててから、まだ足場が残っちゃってなあ、どうすらあ？て皆に聞いたら、（紅一点、女子でただ一人現場部隊に加わっていた）山崎真理さんが『やっちゃえやっちゃえ』言うたき、その一声でよっしゃやれやれ！いうことになって、最後にもう一段上へポンと乗つけたわけよ。それで、おれらあのが一番高い櫓になった。けんどう違反じゃき、おおっぴらにはできん

幸いというべきか、このことは部外の誰にも気付かれること無く終わり、後々まで何のお咎めも受けずに済んだ。田内先生は後に土佐高在職中の思い出や逸話を綴った自著『甚田先生はだか日記』の中で、この年Hホームの鶴見隆平君らが設計につき直さんの許可を得るのに苦心したエピソードを記しておいでるが、当のご自分のクラスが抜けぬけと高さ違反をしていたことは露く存知無かつた。本出版後何度か先生のお宅にお邪魔したことがあるが、ついにそのことは告白しそびれている。

さて、現在では櫓の規格も材料も統一されて、一括して手配されているように聞く。いろいろの事情があつてのことだろうが、やはり、立案から資材の調達まで丸ごと生徒に任せてやらせてこそ、自主独立の精神を培う有意義な行事になるのではないだろうか。

櫓作りを価値ある伝統行事として認識し、時に叱りながらもすべて心得て（内心はらはらしながらだったろうが）見守って下さった先生方に、そしておおらかだった校風にただただ感謝をささげたい。